

実施報告書

10th Anniversary
らくひげろ
俗文化館

総合芸術展

1 主催者ご挨拶

2022 年は弊社の柱となる事業のひとつ、月刊フリーマガジン『つくりびと』が創刊 10 周年を迎える節目の年になります。

出版不況といわれ、これからの時代、紙の本はデジタルに代わると言われていた 10 年前に、読者が手に取りワクワクする気持ちでページをめくりながら、厳選されたアートに触れる体験をしてもらいたいと願い『つくりびと』は産声を上げました。

本が売れない時代なら、売れない本を創るのではなく、売らなければいいという、まさにコロンブスの卵的逆転の発想からフリーマガジンという形態の『つくりびと』は生まれました。誰でも手に取りやすいことに加え、家族連れで訪れる機会も多い美術館に配布することで、願わくは若年層にも「見て」楽しんでもらえる、構えず気軽に向き合えるビジュアルブックとして、一冊ごとに祈りを込めて作り続け、気が付けば通巻 100 号を超え、10 年の月日が過ぎていました。

この度、10 周年の節目となるイベントを国際的なアートとカルチャーの都市である豊島区池袋の東京芸術劇場で開催出来たことを本当に嬉しく思います。

継続は力といいますが、『つくりびと』を支えて来たのはアートの力であり、それを信じる皆様の力なくしては発行を続けることはできませんでした。

毎号幅広いジャンルを取り上げて評論を書き続けてくださっている面谷哲郎氏、ユニークな視点や切り口で巻頭コラムに新鮮な話題を提供してくださる盛山重信氏、また現場の空気感や、その土地土地の歴史などを伝えて下さるキュレーターや学芸員のみなさま、ゲラ校正や画像提供の労を惜しまずフレッシュな情報を提供してくださる美術館広報のみなさま、そして何より本誌およびこの催しにて作品発表をして頂きました『つくりびと』の主演である創作者のみなさまに、改めて心より御礼申し上げます。

感謝の気持ちを胸に、本誌は次の目標に向けてすでに動き始めています。

200 号・20 周年に向けて、これまで以上によりよい誌面作りができるようスタッフ一同、全力で取り組んで参ります。

2022 年 4 月

(株)国民みらい出版 代表取締役 小林義隆



本展会場にて来場作家と

2 開催概要

つくりびと総合芸術展

会 期	2022 年 4 月 15 日 (金) ～ 17 日 (日)
開催時間	10 : 00 ～ 18 : 00 (最終日は 15 時閉館)
会 場	東京芸術劇場 5F ギャラリー 1 (東京都豊島区西池袋 1-8-1)
展 示	絵画・書道・写真・工芸・俳句・短歌・川柳・現代詩ほか
入 場 料	無料
主 催	つくりびと総合芸術展実行委員会
企画運営	株式会社国民みらい出版
後 援	豊島区、豊島区教育委員会
協 力	(財) 言語交流研究所 ヒッポファミリークラブ
広報活動	マスコミ各社にプレスリリースを配布



東京芸術劇場

3 展示構成

平面作品

書道、アクリル画、色鉛筆画、水彩画
水墨画、日本画、特殊素材絵画、油彩画
布絵、和紙折染、和紙絵画

立体および工芸作品

立体および工芸、ハンドメイド・クラフト作品
いけばな・フラワー、大島紬アート、押し花
着物リメイク、写真、染織・染織、陶芸、人形
ソーパークーピング、手編み、パッチワークキルト
文化刺繍、ペーパークラフト、水引工芸、羊毛フェルト

文学・文字作品

現代詩、図書、ノンフィクション文学、詩歌瀬戸焼

児童作品

豊島区立池袋本町小学校・豊島区立高南小学校・豊島区立
高松小学校・豊島区立南池袋小学校 (五十音順)、一般財団
法人言語交流研究所ヒッポファミリークラブ



4 開催レポート

東京芸術劇場は、東京都が芸術文化の振興と、その国際的交流を図るための芸術文化施設として、1990年に開館した地上9階地下2階の施設です。コンサート、演劇など、主に舞台芸術の会場として知られていますが、池袋駅の地下道から直結している利便性、モダンで斬新なデザインも見どころの一つです。

本展の会場は、清潔感のある美しい空間が来場者に居心地の良さを提供することで人気のギャラリーホールとして知られています。

今回で二回目となる『つくりびと総合芸術展』は、開催期間を通じて多くの来場者に恵まれました。初日はそれまでの温暖な気候から一転、冷たい雨の降る中、開館と同時に賑わいました。

本展では全国および国外から国際交流活動を行う青少年による作品も多数展示。アートを通じて世代や国境を越えたイベントとなりました。

開催二日目日には、ヒッポファミリークラブの子供たちおよびそのご家族による見学会が行われ、芸術教育の重要性を再認識されていたようです。

小学校など児童の教育現場では、コロナ禍の影響により、交流が制限されてきました。本展の作品鑑賞がふれあいの場になることを願って参加を打診しましたが、ささやかながら目的が果たせたと自負しております。

そして本展の主役である『つくりびと』達の作品は、永い経験と実績に裏打ちされた存在感を放ち、老若男女を問わず来場者を楽しませました。

本展の出展者は、アート業界初のフリーマガジン『つくりびと』の誌面を飾ってきた、印象深いアーティスト達を中心に構成されています。全国の展覧会、個展などで活動されているか、SNSやブログなどデジタル空間を発表の場にされている芸術家を対象に、素敵な作品を見つけ出し、長い年月と手間暇をかけて個別に掲載をお願いし、ようやく一冊に仕上げるという流れを10年、100冊以上続けて参りました。

掲載作は各分野のアーティストの個性を尊重し、様々な分野から広く紹介出来るように努力して参りました。その基準を展覧会にも持ち込み、多彩な作風を楽しめる展示構成を意識しました。異なる作品分野の複合展示は、どうしても鑑賞時に違和感を与えてしまいます。素材や画材が違えば当然ですが、この違和感の払拭には毎回頭を悩ませて来ました。しかし今回は、一見、整合性が取れておらず、ジャンルも作風も多種多様なのに、まとまりのある雰囲気を感じて下さった来場者も少数ながらいらっしゃいました。

皆様にも同じように感じて頂いたとすれば、每晚遅くまで展示構成を練った甲斐があったかも知れません。

今回、書道2名、布絵・フラワーと染色の各1名に限り、同作者の作品を個人特集展示として複数点展示しております。これには、未来へ継承すべき分野として、多くの世代に伝えたいというテーマに基づいたものです。

子供たちの作品は、子供ならではの愛らしさが鑑賞者の目を楽しませていましたが、優れた空間処理、斬新な構図に目を見張る作品も少なくありませんでした。

そんな子供たちとご家族は、ご自身はもとより子供の作品が目当てで来場されたにも関わらず、『つくりびと』達の作品に惹きつけられ、大人の感性と迫力の明らかな違いに心を打たれている様子でした。

子供たちのご家族から、「素晴らしい作品を生で見て、刺激を受けている子供たちの芸術を見る感性を目の当たりにして感激しました」などの意見が寄せられました。

子供たちからの屈託のない感想が『つくりびと』たちの制作モチベーションを高めることと確信しております。

文学作品についても、俳句・短歌の作品はわが国で屈指の伝統を持つ工芸品である瀬戸焼(御深井釉・織

部釉)を用いた本展オリジナルの文学陶器を作成・展示し、図書紹介パネル、巻物表装の作品と合わせ、ことばの`つくりびと、を表現できる展示として会場を彩りました。

所感

東京都の新型コロナウイルス感染症まん延防止等重点措置が解除されて約一ヶ月。都内はコロナショック前の人通りに戻り、すっかり日常を取り戻したかのような様相を呈しております。といっても、これはあくまで表面的な状況に過ぎないでしょう。

度重なる規制、長引く自粛要請により多くの企業が業績不振に陥りました。同調圧力により個人の精神状態も不安定となり、不定愁訴に苦しむ人々が増加しました。コロナ前の生活に戻るには、膨大な時間と大きな努力が必要になりそうです。

ここに来て、ロシアの侵攻による世界経済へのダメージは甚大で、とりわけ燃料費を始めとする物価の高騰が家計を直撃し始めています。

苦境は続きますが、私達は明日に向かって生きてゆかねばなりません。

さて、そんな情勢を背景に本展を鑑賞した場合、通常の展覧会とは違った印象を抱くかも知れません。

というのも、本展には、あたかも`希望、`復活、をテーマにしたかの如く、華やかでポジティブな作品が揃ったからです。

——アートは、人が本来持っている豊かな心を取り戻す。

本展の展示作を前にして、このように感じた方はどのくらいいるのでしょうか。そしてまた、不安で暗い情勢の中で制限を強いられてきましたが、果たして、コロナ禍前の私達は幸福を感じていたのでしょうか、長期に渡る自粛と制限の中、鬱屈した日々があったからこそ、些細なことに幸福や希望を見出だせるようになっていないのでしょうか。

アートには、ささやかな幸福や希望の光を増幅させる力があります。

コロナ禍はむしろ、期待や、希望、幸福を与えてくれるアートを発掘することが、つくりびとに関わるスタッフ全員の思いであり使命であることを私達に再認識させてくれました。

つくりびと総合芸術展実行委員会







本展にご来場頂いた豊島区立高南小学校・田中明校長



